

L15b

METROキャンペーン2004年ペルセウス流星群観測報告

戸田雅之(日本流星研究会)、比嘉義裕(日本流星研究会)、山本真行(高知工科大学電子・光システム工学科)、石塚洋一(アマチュア天文家)、大川拓也(星ナビ編集部)、高村裕三郎(愛知県立一宮高校)

流星痕は、出現後間もなく消失するアフターグロウから1時間近く継続する永続流星痕とに分けられるが、出現確率が低く個々の出現予測も不可能な現象である。母天体 Tempel-Tuttle 彗星の回帰にともない流星雨が期待されたしし座流星群(McNaught and Asher 1999)にそなえ、我々は流星痕同時観測(METRO)キャンペーンを立ち上げ、アマチュア観測者に観測よびかけを行い、1998年~2002年までの5年間に人類史上最多の約200個(うち同時観測約40個)、約5000画像を取得した(Toda et al., 2003)。この観測から流星痕の形態分類(Higa et al., 2003)、三次元解析(Yamamoto et al., 2003)の初期成果が得られた。ところで、多くの成果を収めたしし座流星群における流星痕に対し、しし座流星群以外の主要流星群における流星痕の観測例は非常に少ない。主要流星群における流星痕の性状解明が流星痕同時観測から期待できる次のターゲットである。2004年8月ペルセウス座流星群ではI.I.+DVの2点観測を実施し、またキャンペーンの観測趣旨に賛同されたアマチュア諸氏の参加による観測網を構築できた。I.I.2点観測は成立しなかったものの、3名の観測者により2夜4個のペルセウス座流星痕の観測に成功した。これまでの観測結果から、ペルセウス座流星群による流星痕の観測は、しし座流星群による流星痕の観測に比べて困難ではあるものの、最適観測条件が揃えばアマチュア観測機材でも十分観測可能であることを示しており、今後も継続して観測を呼びかけることで有益な情報の収集が期待できるだろう。